

## 特集 I ニューガラスフォーラム 20 周年記念

歴代会長からのメッセージ

### ガラスこそ無限の可能性

旭硝子株式会社

相談役 瀬谷 博道

(1996.6~1998.6 会長)



私が会長を務めていた平成 8 年から平成 10 年は、金融機関の破綻など日本の景気をもっとも低迷した頃であったと記憶している。国内需要の低迷、企業収益の悪化、生産・雇用の縮小、家計所得の減少、個人消費減少という悪循環が起こり、事業縮小や支出の抑制という縮小均衡に走る企業が増えた時代であった。

ニューガラスフォーラムもその影響を受け、170 社近くあった会員会社数が 100 社を切るレベルとなった。ただ、これは景気のせいだけではなく、ニューガラスへの期待の大きさと現実との差と私たちは推察した。このため、ニューガラスフォーラム内でもいろいろな議論がなされ、いくつかの施策に取り組んだ。この頃のニューガラスフォーラムは設立時の考えから、変革を遂げた時期とも考えられる。そのうちの一つは、ニューガラスフォーラムの定款の一部を変更し、従来の「調査研究」だけでなく「研究開発」に踏み込めるようにしたことではないかと思う。

ニューガラスフォーラムの特徴はユーザーを含めた団体であることであり、この特徴を活かすためにも、従来の「触媒的機能」にとどまらず、「研究開発実践機能」を持つことにより技術革新を推進しようと考えた。具体的には、これまでのガラスを超える高機能を実現する可能性があるコンジュゲートマテリアル（ガラス系ハイブリッド材料）に関する先導研究をガラスユーザー、ガラスメーカー各社の協力を得て平成 9 年にスタートした。結果として、この先導研究は、国家プロジェクトには至らなかったが、このときの考え方・取り組み方が発展して現在のナノガラスプロジェクトに繋がっていると認識している。ナノガラスプロジェクトが他のナノ関連プロジェクトと比較して高い評価を得ていると聞き、大変うれしく思っている。

現在のニューガラス市場は、当時の予測値より少ないものの着実に成長してきており、電子・光技術の発展にガラスは重要な位置を占めている。紀元前数千年にメソポタミアの焚き火の中で発見されたといわれているガラスが、数千年の時を経て再び進化・発展し、人類に貢献していると考えると不思議な気持ちになる。私は化学関係の仕事が長いですが、今後石油化学がいくらがんばっても、ガラスと同じ物性を持ったものをガラス以上に安く作ることは難しいと思っている。過去の数千年がそうであったように、今後もガラスに替わる素材は出てこないだろう。もちろん、だからといって、ガラス産業に従事、関わるものはそれに胡坐をかくのではなく、さらに革新的なガラスをクリエートして、人類・文化の発展に貢献していくべきであることは言うまでもない。ニューガラスフォーラムがこのことにすこしでも貢献できれば、これほどうれしいことはない。